

グスタフ・ルネ・ホッケ

ヨーロッパの日記

証言記録と時代批判
(四)

信 岡 資 生 訳

3 日記のスキャンダルと日記の偽造

日記の中にはスキャンダルの種を播いたものが多い。これまでもしばしばこのことを指摘してきた。「秘密」が嗅ぎ付けられ、人身攻撃がなされ、政治家の内幕が暴かれ、さまざまな「情事」が告発され、有名人がさらし者にされ、道学者の本性が暴露され、文士の仮面が剥がされた。王侯もその罪を摘発されてきた。これらの動詞に注意して欲しい。嗅ぎ付ける、攻撃する、暴く、告発する、さらし者にする、暴露する、仮面を剥ぐ、摘発する。幾つかの日記に窺われる犯罪捜査癖、探偵気取りの傾向については既に書いた。⁽¹⁾ まったく秘密をこっそり広めてやる気分というものはこたえられない！ また、サミュエル・ピープスの日記を基にして、隠れたもの、背

ヨーロッパの日記

後にあるもの（背後関係）を暴くという、新聞の最も重要な、「ジャーナリストイックな」役目の一つを持つ同類の「暴露的」私的「ジャーナル」も見てきた。シュピッツェムベルク男爵夫人は一八七〇年六月十六日の日記に（ベルリン宮廷という）「すべての情報の源にいる」のは「実に愉快な」ことだと書いている。⁽²⁾一八七六年五月十日、彼女はビスマルク夫人に夫妻の寝室の様子を見せてもらった後で、「もし私がリポーターだったらこの現場のスケッチできっとたんまり報酬をせしめることだろうに」と記している。⁽³⁾既にルネサンス期の日記でも、この種の密かな風俗画や内輪の逸話によって偉大な「公人」の隠れた生活を明るみに引き出し、場合によっては「スキャンダラスな」やり方で公衆の面前にさらしたいという衝動から、こっそりペンを走らせている「私人」によく出会ったものである。

こうした狡猾だが悪意のない探偵もしくは新聞記者めいた「スキャンダル」暴露のやり方を「人文主義者たち」は昔のギュムナジウムや女子高校で学んだ。若い彼等にはすばらしい手本が与えられた。即ち、古代ローマ皇帝の伝記作者トランキルス・ガウス・スエトニウスである。⁽⁴⁾スエトニウスは読者に何一つ隠さなかった。「偉大さ」はそれとして認める一方で、偉大と偽わられた「小人ぶり」を暴いた。初版と第二版は一四七〇年ローマで出版され、「一八二九年までに二百版以上を数えた」。⁽⁵⁾スエトニウスの特徴は——多くの日記作者もそうであるが——「きわどい」「スキャンダラスな内報」を好んでしたことである。⁽⁶⁾彼は滅多に「瑣事^{さうじ}に超然として」はいない。しかし彼は——ランペールがその「あとがき」で強調しているように——「現実事実^{じつじ}に則る極わめてローマ的な伝統に」従っている。「この伝統は造形美術の分野で、即ち個人の外観形状の精確な再現に奉仕する肖像によって最も強く一般に意識されている」。⁽⁷⁾古代ローマの肖像美術と伝記的な日記の関係については後

章で詳しく述べることにし、ここではひとまず、ギリシア・ローマの昔から「スキャンダラスな」伝記もあるということ、またそれがルネサンス期の日記作者に影響を与えたいし、そしてこの皇帝列伝が持つ暴露のテクニクはギュムナジウムの教育によって伝えられて、後世の市民の個人の日記にとっても常に魅惑的な効果を果たすものとなったということを知っておきたい。⁽⁸⁾

内輪の私事や内輪の政治事におけるスキャンダラスなことはヨーロッパの多くの世代の眼を奪った。特に「やんどとなき」王室に関する暴露がそうであった。日記のスキャンダルは「貴顕」人種に関するものでない限り、すぐに忘れ去られるものであることをまず言っておく必要がある。⁽⁹⁾ それ故、とりわけヨーロッパの日記スキャンダルの最大のもの一つになったのが「皇帝が書いた」日記によって撒かれたもの、即ちもう既に何度か引用してきたフリードリヒ三世の日記によるものである。この日記に書かれた極わめて重要な時代記録についてはもう既に記した。そこで日記のスキャンダラスな影響⁽¹⁰⁾については、この日記の公表の結果⁽¹¹⁾を簡単に書くこととすことにしよう。⁽¹²⁾ ビスマルクは、先に記したようにこの（その間に故人となった皇帝の）記述は「怪しい」と言明した。自由主義者たちはこの日記を依り所として、皇帝フリードリヒ三世を「自由政策」の新しい指導者に見せかけようとした。とりわけイギリスの感化を受けて保守に凝り固まったプロイセンから脱皮しようとし始めた皇帝であるとした。ビスマルクはこの危険を直ちに察知した。特に反対派の新聞がこの日記の「公刊」後、鉦先⁽¹³⁾を彼に向けてきたことからである。前に書いたようにこの件に関してはいつそう依怙⁽¹⁴⁾地になった「鉄血」宰相は当時の法務大臣に即刻の調査を要請した。ビスマルクの公訴は、皇帝ヴィルヘルム二世が日記の発行者の刑事追訴に——それも公文書偽造の名目で——認可を与えた後はじめて帝国⁽¹⁵⁾官報に載った。その時でも、ビスマルクも

ヴィルヘルム二世も、日記に書かれたことが本当であることを少しも疑うわけにはいかなかった。ヨーロッパの新聞はこぞって、それぞれの恩惑や狙いもあつて、ますます「スキャンダルだ、」と叫び立てた。フリードリヒ三世の信奉者も、またビスマルクやヴィルヘルム二世に肩を持つ連中も、こうした論争が有害な政治的危険をもたらしたことを悟った。⁽¹⁴⁾ もしも「帝国宰相」が、皇太子フリードリヒ及び皇太子妃ヴィクトリアは英国人のスパイであり、国家機密を漏洩した「自由主義者」だったらしいとほめかし、またヴィルヘルム二世がこのような推量を斥けなかったとしたら、全ヨーロッパの王道は、古代ローマの帝権思想がスエトニウスのスキャンダラスな皇帝列伝によつて危うくされたように、この日記のスキャンダルによつて危うくされなければならなかった。⁽¹⁵⁾

フリードリヒ三世の日記の一節をここに再び取り上げて読んでみよう。「余は、帝国の自由なる発展のまことを疑う。将来の余を期待する新しい時代のみが、この日に出会え、と信ずる。」⁽¹⁶⁾ この言葉は他の観点からしてもなかなか意味がある。フリードリヒ三世も、ルイ十六世やナポレオンに倣った皇帝政治妄想の意味での絶対主義の復活は一七八九年以後のヨーロッパではもはや考えられないことをどうやら本能的に悟っていたらしい。それでいながら彼はなお、十九世紀の多くの日記作者と同様——これは今にしてようやく判ったことだが——ファラオの幻想にとりつかれ続けている。「余を期待する新しい時代」と彼は言う。どんな新しい時代のつもりだろうか？ 誰が彼に期待したか？ ペルリーンの宮廷で彼は笑ひ者であり、彼の妃についても悪口さんさんであったのに。一八八八年三月二十八日、物議り屋のシュピッツェムベルク男爵夫人はこう書いている。「ペルリーン・ウィットはとうとう新しい君主までも姐上に載せるようになった。人々はフリードリヒ三世と言わず、ブリタニアのフリードリヒと言っている。皇妃は『マケンズィー』⁽¹⁷⁾（訳者注：ペルリーン方言で「彼女」のことなら知っている）の意」である。」

このロマンティックで一貫性に欠ける晩熟のプロイセン人、九十九日間の皇帝は、日記によって真の「スキヤンダル」事件を惹き起こしたようである。上述したように王道は崩れていたのだ。このことを万事に通じたシュピッツェムベルク夫人は見逃さなかった。彼女はその後も毎年毎年「若い新帝」「派手な」ヴィルヘルム二世にまつわるスキヤンダル事件の記述に忙しくなる。一八九二年二月二十四日彼はブランデンブルク州議会の晩餐会（晩餐会）で豪華な食卓を前にしてこうぶちあげた。自分は「天が自分に命じた」道を前進し、ロスバツハ（訳者注：ライプツィヒ西方の古戦場で、一七五七年フリードリヒ大王がフランス軍を打ち敗った。）やデネヴィッツ（訳者注：ポツダム郊外の古戦場で、一八一三年にベルリールへ進撃するフランス軍をプロイセン軍が打ち破った。）での古き盟友である「至上の主の前に立つ」心でブランデンブルクを栄光へ「導く」つもりであると。これにはいかに王室蟲眞（むぎまこと）の女官といえども呆れてしまった。彼女はこれについて書いている（一八九二年二月二十八日）。「先日の州議会での皇帝の御発言には一同愕然となり、嘆かわしく思う。これはこうした事柄に関しこれまでに出出かされた中で最悪のもの。まことに誇大妄想の危惧の念に駆られるものである。陛下が与えようとされる神の王室に対する地位なるものは人間の立場からしても途方もないものであるし、神——王家を持ち上げるために「尽力」しなければならぬ神なんて！——からみても笑止千万といえる。自分にできるとお思いの指導者気取りときては荒唐無稽の大風呂敷で、聞く人の心胆を寒からしめるものである」……「このような事柄のいっさいはまことに憂慮にたえず、しばらくは深刻な気分⁽¹⁸⁾に沈む」。

全く奇妙なことであるが、二十世紀では醜聞を求める願望が現世の修正の欲求と一致するのである。⁽¹⁹⁾つまりは「スキヤンダル」の中で人間の誤った神格化や偽りの超人が無意味・無価値として暴かれるということなのであるのか？ 当然ながら「スキヤンダラスなこと」は、とりわけ偉人の生活の偽の暴露はしだいに商売にもなる。

近代史において、「スキャンダル」という言葉が十八世紀の初め「迷惑、紛争、騒ぎ」の意味でドイツ語に登場したのは当然だった。それは、いわば初期の「醜聞」内報の日記の予告であった。二十世紀になると「スキャンダル」新聞の、特に英国における普及と関連して、多くの贋金造りたちは日記を偽造する気を起こさないではおれなくなる。⁽²⁰⁾ 絵画、彫刻、切手、家具に偽造があるのに、何故「偉人」の日記にも偽造があつてはいけないのか？ 偉人の腹心、大物の側室や侍従、国王、独裁者、ボクサー、フットボールの選手、ギャング、麻薬密輸業者の偽造日記が、

最も有名な偽造もしくは隠蔽の一つは、取り澄まし顔の当該文書の番人たち自身の手によって、マリ・アントワネットの愛人ハンス・アクセル・フォン・フェルゼンの日記の中で行われた。他の事柄に関しては大へん口の堅いこのスウェーデン貴族の日記では、王妃との秘められた関係が読み取られそうところは全部省略されている。しかしフェルゼンが間違いなく王妃の情夫であったことを示す二つの言葉だけはインクで塗り潰してあった。それが今は現代科学の力のおかげで再び読めるようになっていた。その言葉は *"resté là"* (そこに居残った)。即ちフェルゼンは、実際にはもう夫君ルイ十六世と共に革命の虜囚となっていたテュイルリー宮にマリ・アントワネットを秘かに訪れた後、王妃の寝室に「居残った」のだ(一七九二年二月十三日)。⁽²¹⁾ 偽造日記や、日記をめぐる訴訟の「判例集」を書くのは他の専門家に任せよう！⁽²²⁾ ただ、——歴史的観点から見ても——ストゥウスやヨーハン・ブルカルトの縄張りであるローマの中で最大と言えそうな日記偽造が起きたのは偶然ではないということに注意を喚起したい。ここでまた、これまでにも繰り返して書いたことを改めて強調したい。第一に、ヨーロッパ人の個人的自己投企におけるフアラオ的誇大妄想癖。第二に、真の宗教を喪失したヨーロッパ大

衆の疑似魔術的自我フェテイズムの傾向。

第二次世界大戦後イタリアで、ヨーロッパ最初の世俗の疑似皇帝の一人の、ありもしない日記を変造どころかすっかり「捏造」して売り出した一味に対する長期の訴訟が起こされた。これが即ち小市民的「指導者」ベニート・ムッソリーニの「日記」と称するものである。この成り上がり者の傭兵隊長は、贋金造りの関心をそそらずにはおかなかったのだが、この「ドゥックス」の私生活もどうやらスエトニウスの描く多くのいかがわしい「皇帝」の習癖と類似したもののようであった——実際には彼の登場は、むしろ「枢軸」の時代におけるローマの多くの小市民成金の出現に符号するものだったのだが。わけでもそこでは情婦が活躍した。見事な政治的策略、陰謀、ヒステリー性の天啓、ヴィルヘルム二世流の大言壮語があったことになっていた。ジャーナリストたちは早速方々の大都市に向けて無線機のキイをたたいた——曰く「ローマの七つの丘の神秘」の言葉、曰く新しい「秩序」の天才の黙示録。こうしたことに言及するのも、疑似皇帝の日記の捏造を見ることによって、日記の詐欺師たちがこの種の日記のコンビネーション、即ち本物でない偉大と日常卑近の真実とのコンビネーションが発揮する効果をいかによく心得ていたかを改めてはつきりさせたためである。⁽²³⁾⁽²⁴⁾

4 誠実性の問題

人間学的な解明に資する意味で、ここでもた一つの全く別の問題が重要となる。この疑問は既にこれまでの叙述の中でも立てられてきたものであって、日記における自我の変造の問題である。ロマンティックな仮装やアイロニックな扮装については既に或る程度考察してきた。⁽¹⁾また、自己の姿にいわば違った照明を当ててみようとする

る無意識の心の動きのあることにも触れておいた。⁽²⁾ こうした際に働く奇妙な心理学的メカニズムについて少々立ち入った考察をしてみたいと思う。これまでは主に動機を中心に論じてきたため、自我の「転位」を求めるこの一種独特の衝動については未だ詳しく述べることができなかったのである。ヨーロッパの最も秀れた日記における精神的抑圧の発散のショックングなテクニックに対して、変造の穏やかなテクニックがある。日記という内密の場の中でだけ暴かれた事柄にもしばしば直ぐまた乞食、王、悪党、聖者の衣が被せられるのである。精神分析学に従えば各人間の理想像の不断の更新である。「混沌とした」無意識の発散が多少とも許された後、絶えず新たな「^{インテンシファイカイオン}確認」⁽³⁾が、それもたいてい変造された自我拡大もしくは自我矮小の形で求められる。こうした場合日記は意識された自我と無意識の分身との間に交わされる恍惚の対話の舞台となる。このことは、創造的な内省者も自らの経験的自我現実に厳しい自己批判を加えるに当って絵像に、「神話」に化体するを免れ得ぬことの証明になると思う。極わめて冷静な自我分析も虚妄の自我合^{ジニフタセ}成を排除しない。「自我」の中に見出されたものがたいてい存在投企の願望像もしくは理想像に変造されるといってよい。この意味では仮借なく自己を暴露する日記作者も「嘘をつく」。これは詩人がプラトンの意味で嘘をつくのに似ている。日記の二重人格は——たいいていの場合——回避できない必然の現象である。自我が裸にされると同時に、自身の自我表象の中でそれに別の役割が、卑屈になった自我の分身、もしくは偉ぶった自我の分身の役割が与えられる。⁽³⁾ その際、場合によってはこの「理想の」自我の方が、苦しみ且つ（たいいてい）憤りつつ分析される「現実の」自我よりも日記作者にとっては創造的なものに映る。これは明らかに自然の「自我」ではなく超越的な「自我」の知恵である。これが全く非妄想的な人間までも駆り立てて超人間的存在秩序のルールへ押し入れる。ここで、まさに内省の中で、⁽⁴⁾ヨーロッパ

的伝統の反対者がこれまでおおむね心理学的に取り扱ってきた一つのミステリーが現われる。⁽⁵⁾ いかなるミステリーであるか？ 今これを「変造」のミステリーではなく、必然的な自我鏡像の中に生じる変身のミステリー、より高次の現実性、存在論的現実への変身のミステリーと呼んでおくことにしたい。換言すれば、自我は絶えず一つの局限としてのみ現われる。自我がその限界を越えれば越えるほど——純粋な自我分析においてさえ——ますます自我超越存在、自我の異種存在に遭遇する。「神々よ、なぜならあなたがたはこれらのものをお変えになったのだから、(私の変容の)企てに……」。こうした日記帳の中では、神々の変容の力が復活し、この変容の謎を猜忌の念をもって見守るアルゴス^(訳者注 多)の百の眼も永遠の神慮の力によって眩まされる。その力は我々にはただ予感することしかできない。^(?)

あらゆることを時間的「連続」として書きとめる日記作者は、時間を高い次元の同時性として感じることを強いられるのではなからうか？ 時間の中で働く意識と潜在意識の間の因果関係が捉えられると、その後で先述の通りしだいに奇妙な自我修正が始まるのである。多かれ少なかれ鋭い自我認識の樹を食べていけば、確かに日記作者の多くの不安は取り除かれる。それは彼の抱く多くの妄想や偏見を解き、彼を偏向から守ってくれる。自我観察と(或る種の)自我認識は彼を解放し、大胆にさえしてくれると言つてよい。しかしながら、暗闇からの日毎に新たに繰返される分析のみの自我認識を通り抜けての逃走は天国への最短コースをたどらないのである。このヨーロッパに特有の自律の努力がどんなものであれ、またいかにすばらしいものであっても同じだ！ 自我に向ける批判の視線がレムール^(訳者注 死霊)の徘徊する横道にそれる。日記で自己を分析しながら送る人生行路の途中にはしばしば幻のデーモンの館が並んでいる。一步誤ればブリューゲルの獣たちがそこから飛び出してくる。こ

のように分析一図の自画像は、戦慄の双面を持った神々の領域へ、無気味な素顔と恐怖の仮面を同時に備えた神々の夢遊の国へ迷い込み易い。

ここに文学と日記との、もしかすると決定的な区別がある。文学では「詩と真実」が婚礼を挙げることができ、分析と神話はけっして結婚しない。神は傍に道化の侍るのを許してもソフィストが侍るのを許さない。特に自分自身だけを相手に夜密かに盗賊将棋を指すようなソフィストだけは。ところが、この——自己と時間との——勝算のない勝負から一つの高い認識価値、日記のいわゆる自我変造という超相對価値が生じるのである。この強制変身は、経験のみを重んじる自我が自己を日記の中で変えるのは自己愛の理由だけからではないということの証明になる。別の「方向」へ進むことで、人は——自我として——超經驗的座標系の中にも一つの位置を占めていながら、それを——幾人かの神秘的宗教的日記作者は別として——故意に全く意識していないということが証明される。⁽⁹⁾

我々は本書の新しい主要テーマに近付いた。それは人間の分裂性、「人間の栄光と悲慘」についての多数の日記作者の基本的憂慮の問題である。⁽¹⁰⁾ 多数存在するこの種の疑問の一つに疑いもなく入るものとして次の問がある。即ち、「変造」が無常と絶対の間をカメレオンのように体色を変えながら漂う自我に適合するものであることが明らかだとすれば、いかにして人はそもそも誠実であり得るか？ 両界に適うような、「自然」と「精神」の交点としての人間の現世及び超現世の運命に適うような誠実の道と方法があるだろうか？ この問をデンマークの詩人パウル・ラ・クール（一九二〇年生）はその「日記の断片」の中で孜孜として追求した。⁽¹¹⁾ 彼の断片は体験の記録、「熟考の散乱した結実、更に言えば生の正当化の試み」⁽¹²⁾である。ラ・クールは序文の中で日記のメモから

集めたこの省察集をそう説明している。このデンマークの詩人が「詩的宣言」とも名付けるこれらの覚え書きは「自然にまともって幾つかのグループを作った。」⁽¹³⁾これらの文章は「誠実」というタイトルでまとめられる。それらは深い含蓄のある言葉でこのテーマを反復し、また種々の角度から論じてしだいにクライマックスへ高まって行く。翻訳者がまえがきでヘラクレイトスとの類似を指摘するのも無理もない。⁽¹⁴⁾挑戦的に、繰り返し二者択一を迫りながらラ・クールは言葉を投げかける。「自然に湧き起こる誠実なるものを信じてはならぬ。血の沸騰の如く汝の中に湧き上がり口中を苦味で満たすもの、この腐敗せる雑草の如き臭い、刺のあるこの奇妙なる生の裸の自然、汝の知力を溺れさせる汝自身の中の汝の知らぬ深淵より襲来せる陣風——これは誠実にあらず。誠実は清澄であり闊達^{かつ}であり健全であるのに、何故これは混濁として人を傷うものなるか？ 誠実は緩慢であり浄化であるのに、何故これは本能の如く暗く且つ突然であるか？

汝の中で太古のものが目覚めしとき汝は誠実なりと信じたり。しかれどもそれは心の奥底の深層、デーモンの力であり、それらがヴェールをかなぐり捨てたに過ぎぬ。汝はこれと戦わねばならぬ。これを克服する戦いの中で汝は人間となる。

本能の自発的な生みの力が汝の中で活動せざる^いとき汝は何者にもあらず、汝が最初のものを有せぬときは、汝が後から手に入れる最後のものをもってこれと戦わざれば汝は未だ何者にもあらず。汝が除々に身につけるものは即ち明徹なる誠実、人間精神。

思い誤ることなかれ。誠実は本能にあらず。本能の自然は断じてこれを有せず。汝が真実を述べりと信ぜしとき汝の中に感ぜし情熱、衝動の如く激しく遮二無二感ぜしもの、それは誠実にあらず。誠実の实体は教化なれば

なり。」

ラ・クールは更に突っこんでいく。「生の自然が汝の口を動かせるときは汝が最も誠実から遠去かりしときなり。そのとき汝は深く汝自身の内部に不安を、汝自身が傷つきていたればこそ汝が他者を傷つけるに用いし暗く直接的なるものに対する不安を感じたり。それは新たな恐怖の種子を播きてわれとわが身を麻痺させる死の不安なりき。

明るく欣然たることによりて誠実を見分けるべきなり。誠実は克服なり完成なり。自然にあらざる精神なり。

もしも芸術は自然に湧き起る誠実なりとせば、叫びは最も純粹なる芸術作品となり、メモは詩よりも偉大となり、火災はドラマよりも真となり、偶然と反射が法となる。われらは野蕃人となりて生きることとなる。

誠実は闘争なり。直接的なるものを靡かせんがためのこれとの闘争の戦果なり。敵が屈服し、汝の真実追求の心に従うとき汝は人間となれる。

汝が恐るべきものは汝の本性の中のデモニッシュなるもののみにあらず。汝を圧倒せんとかかる生の直接的なるものの信奉にあらず。真の誠実へ進まんがためには汝の誠実を捨て去らねばならぬ、汝自身の誠実を。この蛆虫があらゆる告白者の著述の中で蠢きおる。傲慢不遜にひけらかされし見せかけの誠実は欺瞞。それは彼等だけの誠実、自己自身についての彼等の妄想に過ぎず。

汝が刻達すべき深き誠実は個性の外に存り。それは汝の容貌を備えずして無名なり。誠実は断じて個人のものにあらず。⁽¹⁵⁾

別の箇所ではこう述べられている。「自然」は「空虚」である。それ故に吾人は「人間を創り直さんがために」

自然を利用せねばならぬ。「これあらゆる生命ある芸術の窮奥の目的なり。」——「誠実は勇氣を要せず。恐れを知らぬ眼を有せず。不安に對し未だ子供なればなり。」⁽¹⁶⁾

こうした日記は存在、学的批判の日記へ、宗教的護教論あるいは存在解明の神秘論の日記へと移行する。それらは未だ——あるいは又しても——信仰の啓示地理学の中で動いている。⁽¹⁷⁾ そうした日記、自我の中にある、あるいは周囲世界の中にある存在の疑惑的なものに反應する特種の創造的な要素を持った日記を繙く前に、日記作者等が様々な經驗を基にして人間の本性自体の「謎」をどのように解こうと努力しているかを問わねばならない。我々はこれまで人間の榮光よりもむしろ悲慘の現われる道を歩いてきた。人間の偉大と人間の悲慘！ このひどい矛盾をどう説明つけたらよからう？ 一七九五年祖國が重大な危機に見舞われたときメーヌ・ド・ビランは日記に、人間にとっていったい未だ救いの道があるものだろうかという切実な疑問を立てた。尊敬に値するものは十二分にある、と彼は書く。たとえばマルク・オーレルとその理性哲学である。「確かに理性と哲学は事物を成立させることができる。しかし或る一定不變の意志によって操られているとしたら、そもそも人間の本性に何の能力があるかが人間にどうして判るだろうか？ 人間は官能の衝動に屈すれば浅ましく下劣となるが、理性の支配の下では大きくなって賞讃に値するものとなる。人間の偉大と人間の悲慘。情熱と理性のこの対立は原罪をもつてする以外説明できない。」⁽¹⁸⁾ 自我を見つめ、隣人を觀察するうち、内省や時代批判を超える根本的な人間学的考察が起る。一七九五年にはメーヌ・ド・ビランは未だストイックな理性とストイックな意志を信じていた。その二十五年後彼は單なる「正統主義的」復古あるいは單なるストイックな環境克服の見込みの無さを見抜いた。彼は、キルケゴール以前のヨーロッパの最も鋭敏な宗教思想家ブレイズ・パスカルに近付いた。パスカルと同様

このフランス国の最も明敏な哲学者の一人であるメヌ・ド・ビランは、思想豊かな「私^{ジュルナル・ファン・タイム} 日記」の結びで「宗教のみが哲学によって立てられた問題を解くことができる」と確信するに至る。⁽¹⁹⁾これは確かに、思想家にして政治家たる者（因みに彼は晩年には第一級の「現代風の」実存主義的神秘思想家の一人となった）の立てた命題としてはいささか余りにも断定的である。しかし彼がこれに関連して「人間の偉大と悲惨^{グランドウール・エ・ミゼラブル}」の緊張関係を——気負ったグリユーネヴァルトの指で人間の困窮、とその克服に必要な犠牲を指さしているのには大いに心服させられる。さてそこでいよいよ人間の「大いなる」時代と「惨めなる」時代におけるヨーロッパの日々の記録の全く別の領域へ足を踏み入れてみることにしよう。

原注

3 日記のスキャンダルと日記の偽造

- (1) 「探偵」(Detektiv) という言葉はクルーゲの「ドイツ語源辞典」(Kluge: Etymologisches Wörterbuch der deutschen Sprache) によると一八六八年に英語の detective からドイツ語に入った。英語ではこの語は一八五六年以来「刑事巡査」(detective policeman) の短縮形であった。ヨーロッパ文学の反古典的な「マニエリスティックな」主観主義の中における犯罪小説の意義については、ホッケ 文学におけるマニエリスム (Manierismus in der Literatur) 二二七ページ。

- (2) 上掲書 九五ページ。

- (3) 上掲書 一五七ページ以下。こここの「スケッチ」というのは次のようなものである。「とても幅の広いダブルベッドに高く丸められた毛布と枕——ここに休む人が懸命になって睡眠と元気の回復を——もしかすると忘却も——目指すことを示すうらわびしいしである。床に敷かれた毛皮、小卓の上に書物、書類、大きな緑色のランプの

筥、壘とグラス……」

- (4) 日記を書くことは十九世紀の初めには既に高等教育の一つに入っていた。上流家庭の子女は「音楽、スケッチ、フランス語、英語少々、乗馬、馬車の操縦、植物採集、絵画、詩歌、演劇と——日記」を習わねばならなかった。ヒルデガルト・フォン・シュビッツェムベルクの日記に添えられたフィーアハウスの序文参照。上掲書二二ページ以下。

- (5) スエトニウス 皇帝列伝 三四一ページ参照。スエトニウスはまた「著名な娼婦たち」や「ローマの風俗習慣」についても書いた。スエトニウスがアレクサンドリア時代の伝記文学の影響を受けたことはマニエリスムの研究にとって興味深い。プルタルコスについては第七章参照。またフリードリヒ・レオ 文学形式から見たギリシア・ローマの伝記 (Die griechisch-römische Biographie nach ihrer literarischen Form) ライプツィヒ 一九〇一も参照。

- (6) 先に引用のA・ランベールのスエトニウス書のあとがき参照。上掲書三三九ページ以下。

- (7) 同書 三三九ページ。

- (8) スエトニウスは数世紀にわたって「皇帝の」生活記録の模範であった。たとえばカール大帝の伝記作者アインハルトにとって、また「有名人について」(De viris illustribus)を書いたベトラルカにとってそうであった。「スエトニウスによって伝記は歴史の地位に上った。」同書 三四一ページ。

- (9) このスエトニウスのテクニクに何千となき「歴史小説」の作者は擒とらとなった。宮中の機密室のドアでの立ち聞きや、王侯の寝室の鍵穴での覗き見シーンが何千万という小市民読者の興奮を幾度となくかき立てた。

- (10) 既に触れた一八八八年十月の「ドイツ展望」誌上での部分公表後。

- (11) この最初の断片の公表は皇帝の知らぬ中に行われたとされている。彼自身は掲載権を一九二二年と定めていた。テ

ヨローロッパの日記

ヨーロッパの日記

キスト部参照。

(12)

シュピッツェムベルク男爵夫人は一八八八年十月九日の日記に次のように書いている。「主な話題と言えばフリードリヒ皇帝の日記とビスマルク侯の回想録である。」男爵夫人はこの日記の信憑性には疑いを持たなかった。彼女は更に続けて、自分は「さしあたり勝ち誇った皇太子が慎みを忘れて体面を汚すような真似を仕出かさないう止め」なければならないと書いている（上掲書二五四ページ以下）。彼女が一八八八年十二月三日に日記に書いていることだが、ビスマルクはシュピッツェムベルク男爵夫人と交わした後日の会話の中で、厳しい調子で——後で（同じような内輪の会話で）ヴィルヘルム二世のことを論じたのと同じ調子で——フリードリヒ三世のことをこう語った。「皇帝フリードリヒの自由主義なるものは甚だしい政治的無知から出たものであることを人々にまずはっきり判らさなくては。彼は、虚栄に眼を眩まされたり、情熱に惑わされたり、他人の言葉に乗ったりさえしなければ実に良い人間なんだが。」上掲書二五七ページ。

(13)

この日記断片の発行者は無罪となった。訴訟費用は国費でまかなわれた。

(14)

スエトニウスについての本章前節の記述参照。

(15)

スエトニウスがフランス革命の文士たちに反専制の熱弁の素材を提供したように、ルクレは「事物の本質について」(De Natura Rerum)を書いて、一七八九年の革命のイデオロクたちが理性の女神に捧げた讃歌の資料を授けた。詩人アンドレ・シェニエの弟リュシャン・シェニエは、「創造の」ヴィーナスに捧げるルクレの讃歌をノートル・ダムノートルダムの「理性の女神」礼讃の手本とした。G・R・ホッケ フランスにおけるルクレ (Lukrez in Frankreich) ケルン 一九三八 を参照。カミュは、ルクレは「人間の苦痛の名において神への初の攻撃を」企てたと書いている（革命的人間 三六ページ）。

(16)

一八七一年三月七日の記述。この言葉の影響について叙述しているE・エンゲルより引用。上掲書七〇ページ。傍

点は著者。

(17) シュピッツェムベルクの上掲書二四七ページ。二〇二ページ、二〇四ページも参照。

(18) 同書二九七ページ以下。傍点は著者。シュピッツェムベルク男爵夫人の日記に書かれたヴィルヘルム二世の「スキャンダラスな」振舞への批判については上掲書二七〇、二七一、二八七ページ以下の記述も参照。

(19) 一九〇七年十一月六日シュピッツェムベルク男爵夫人は日記の中で「スキャンダル病」という言葉を使っている。上掲書四七七ページ。これはモルトケ対ハルデン、ビュロー対ブランドの「中傷訴訟」、オイレンブルクのスキャンダル事件とこれについての皇帝の途方にくれた態度のことを言ったものである。

(20) スキャンダル (Skandal) はギリシア語の skándalon, 即ち「畏^{おそ}の調整板」から出た。ラテン語の scandere=「登る」や scala=「階段」と同系である。新約聖書では「蹟^{あと}き」の意。早くから学生俗語に入っていた(クルーゲの上掲書による)。普通は若い世代ほど「スキャンダラスな」日記を書きたがることを想起したい。「賢人」はあまりに急激な変動や衝撃の効果を避ける。宗教日記ではキリスト教徒の蹟^{あと}きとしての skandalon は当然のことながら全然別の意味を持つ。たとえば就中セーレン・キルケゴールやレオン・ブロワの日記にそれが見られる。第九章及び第十章参照。

(21) ハンス・アクセル・フォン・フェルゼン 日記 (Dagbook) ストックホルム 一九二五—一九三六。仏語版 アクセル侯フェルゼンとマリ・アントワネット 未完の書簡と私日記 (Comte Axel de Fersen et Marie-Antoinette, Correspondence et journal intime inédits) バリ 一九三〇。隠蔽の次第についてはシュテファン・ツヴァイク マリ・アントワネット (Marie-Antoinette) ベルリן 一九四九。三六五ページ以下参照。

(22) 最近の実例の幾つかに触れておく。愛人を殺害したザーレンベック(リューネブルク)の市長に対して起こされた訴訟で、特に被害者の日記が証拠となって犯人の罪が確定した(「ヴェーゼル・クリール」紙の記事。ブレーメン

ヨーロッパの日記

ヨーロップバの日記

一九六二年九月二十二日付）。婚約者のフランス娘をスイスで撲殺したビルマゼンスの製靴業者フィリップ・ロートハールは、自分の日記にこのことを記していたために大へん不利となった。兇器を象徴的に表わしたハンマーの絵が描かれてあったのである（一九六二年九月五日付「ハノーフェルシェ・アルゲマイネツァイトウング」紙の記事）。人を雇って妻を扼殺させた罪で終身懲役を宣告されたミラノの商人ジョヴァンニ・フェナローリは嫌疑を晴らそうとして刑務所日記を書いた（「バエーゼ」紙掲載、ローマ 一九六二年九月から十一月）。妻と三人の子供を絞殺したスイス人ハンス・ウルリヒ・ブライズィヒは警察に自首する前に犯行を記した自分の日記をスイスの日刊新聞「ブリック」に掲載させた。これがきっかけとなってチューリヒでは新聞のスクヤンダル騒ぎが起こった。チューリヒの新聞協会は責任者の編集員を組合から除名した（「デュー・タート」紙、チューリヒ 一九六二年十月十八日の記事）。

(23)

アマーリア・パンヴィーニとかいう人物の捏造したムッソリーニの日記。彼女は禁固刑を宣せられた。しかし実際に存在するムッソリーニの秘密日記の真偽が今なお論議されている。この日記はボンツァ島とマッダレーナ島で書かれたことになっている。イタリアの週刊紙「テンポ」参照。「テンポ」は一九六二年五月に日記の一部を公表した。内容の極わめて乏しいもので、要するにドゥーチェはファシズムの不滅を表明しているだけのことである。

(24)

戦後刊行されたエヴァ・ブラウンの日記と称するものも偽ものであった——読者はここで、被告が自分のアリバイを作るために母親の日記を偽造した罪を問われたエヴァ・ブリュナー事件（ミュンヘン 一九六二年）を想い起こされるがよい。最近も元ナチ親衛隊長ランダウの裁判で日記が被告に大いに不利な証拠となった（シュトゥットガルト 一九六二年）。

- (1) 第五章参照。
- (2) 第一章、第二章参照。
- (3) 第七章参照。
- (4) 第二章参照。
- (5) 第十章参照。
- (6) オーヴィッド 変身 (Metamorphosen) 第一編 第二節参照。
- (7) 第八章参照。
- (8) 第七章参照。
- (9) 第十章参照。
- (10) 第七章参照。
- (11) A・レオンハルトの翻訳。フランクフルト・アム・マイン 一九五三。
- (12) 上掲書 九ページ。
- (13) 同書 八ページ。
- (14) 同所。
- (15) 同書 五二ページ以下。傍点は著者。
- (16) 同書 五四ページ以下。傍点は著者。
- (17) 第九章、第十章参照。
- (18) 上掲書 六三ページ。
- (19) 同所参照。

ヨーロッパの日記

訳者あとがき

本稿をもって「証言記録と時代批判」の章は終りである。「ヨーロッパの日記」の他の章についても逐次掲載していきたいと考えている。なお、原著のイタリア語及びラテン語の訳出と固有名詞等の片仮名表記について特に文芸学部戸口幸策教授の教示を仰いだことを追記しておく。